



まぎしま

地域の宝をつなぐ 一棧島ほうき

地域に二百年伝わる手作りのほうき

庄内町槇島集落には遠く江戸時代から代々受け継がれてきたほうき作りの伝統がある。最上川に近く、水害が多い地域であったが、水はけのよい土地の性質がほうきの原料となる「ほうきまきび」の生育には最適であった。農閑期に入ると力が必要なほうき作りを男性が行い、女性が行商で売り歩き、各家庭の生活を支える冬期間の収入源となっていた。

槇島で栽培されるほうきまきびは穂先が固く、柄から先端まで一本のほうきまきびを束ねて作るため、軽く丈夫で、穂先がすり減っても座敷、台所、農作業小屋と場所を変えながら数十年使うことができる。

「槇島ほうき手作りの会」を設立

「子どもの頃、祖父が早朝からほうきをたたいて作っていた音が耳に焼きついている。自分たちが学校で勉強できたのも、ほうきの収入があったから。ほうきに対する感謝の気持ちはずっと持っている。」と語るのは会長の日下部市雄さん。掃除機の普及とともに需要がなくなり途絶えかけていたほうき作り。伝統を守り地域おこしに役立てようと町観光協会からの後押しを受け、集落の有志と平成22年に会を設立した。

ほうき作りをとおして農業の楽しさを体験してもらいたいとの想いから、県内外の人が参加し「ほうきまきび」の定植からはじまる「槇島ほうき応援隊」や、地域の子どもたちへの「出前授業」などの活動を行っている。



園児たちの刈取体験



高校生のほうき作り体験

活動あつての槇島ほうき

「出前授業」は地域の幼稚園児から大学生までを対象に定植、刈取、ほうき作りを体験できる。材料の確保や手作りの苦勞の過程も含めてそこに愛着や価値を感じることができる。

人をつなぐ地域の宝

自分たちが子どもの頃に体験したように、子どもたちが自ら体験することで地域の技をつなぎ、地域への自信と誇りを育てたい。それが地域の担い手や、農業の後継者を育てることにつながる。と日下部さんは考えている。

「学校、地域などたくさんの方を借りて、10年、20年先も地域が一緒になって活動を継続できるように頑張っていきたい。」続けていくことの難しさや大切さを語ってくれた。

ほうききびの種とほうき作りの技術を守り、檀島のこの伝統を「地域の宝」として次の世代へとつないでいくための取組みを続けている。



「檀島ほうき手作りの会」
会長 日下部 市雄さん

檀島ほうきが出来るまで

春 定植(5月下旬)

ハウスで育てたほうききびの苗を畑に植える。

夏 刈取(8月下旬)

2m以上に成長した、ほうききびを一本ずつ刈取る。

秋 乾燥・脱穀

乾燥、脱穀。ほうきの長さに揃える。

冬 ほうき作り

全て手作業のため達人でも1人で作れるのは年間30本程度である。



檀島ほうき応援隊 (平成29年度の活動)



11月11日、ほうききび作りから参加している、応援隊の方々のほうき作り体験が行われた。達人たちの指導のもと、休憩も忘れるほどに集中して作り上げたミニほうきを手にし、参加者からは貴重な体験ができたという感謝の気持ちや、もっと大きいのを作りたい、また来年も参加したいという意欲あふれる感想も。体験後の昼食会は、芋煮など地域のお母さんたちの手料理に会話も弾み、地域と県内外の方々の交流の場にもなっている。

時代に合わせてアレンジ

ほうきを束ねる木綿糸は、昔は黒一色だったが、今はカラフルなものも使っている。パソコン用やストラップなど用途に合わせて大きさに。
原材料に化学染料を使わずに手染めで仕上げるなどのこだわりも。

